見た・聞いた・考えた

―北欧の福祉・教育を考える旅から―

〈寄稿〉 全障研事務局長　薗部 英夫 さん

第3回　教育の核心

「10年後の国のために樹を植えよう。100年後の国のために人を育てよう」。1997年、ベトナムを旅したとき、小さな学校の入口にあったホーチミンの言葉だ。

写真1　6年生のクラス

ナパーム弾や枯葉剤で破壊されつくした自然の再生と人づくりは、イデオロギーを越えて国づくり＝未来づくりの根本なのだろう。

3・11後、大震災とフクシマに向き合うこの国の現与党や旧与党の力の底が見えきってしまった中で、私たちが未来に生きられるための社会づくりの大運動が必要だ。

そのカギはなんだろう？

＊

朝8時半。1月8日のフィンランド・エスポー市にあるオーロラ小学校はまだ暗闇の中にある。白樺の木肌がライトに照らされて白く光っていた。

音楽とパソコンが大好きという校長は私と同い年で波長が合った。2007年以来3度、障害児のインクルーシブ教育を中心に視察させてもらっている。次はそのバルト校長の言葉だ。

「フィンランドの学力世界一の秘訣？それは一言ではいえないけど、

① すべての子どもたちが無償で教育を受けることができる。自治体ごとの学校差はない。

② 教員の専門的知識や技量が高く、研修が充実している。

③ おくれた子どもをおいていかない教育だから平均点が高い。

④ 学校現場に裁量が与えられ、授業時間数・カリキュラム・教育方法・人事も教員と保護者が協議して決める。

⑤ テストはない。あるのは大学進学資格試験だけ。大学進学率は40％。なりたい職業の第1位は教師だ」。

写真2　なわとび

全校児童300名ほどの小さな学校の校長と同じことをフィンランドの元教育大臣が話していた（『NHK未来への提言オツリペッカ・ヘイノネン「学力世界一がもたらすもの」』）。

彼は29歳で大臣に就任し、日本の1947年教育基本法等に学びながら、10年間で教育制度を確立したという。

「平等な教育こそ、フィンランドの大切な原則です」「教育現場に裁量権をもたせ、教える内容や教え方を、現場の教師が自由に決められるようにした。自ら教材を準備し、学校ごとに独自のカリキュラムをつくる」「子どもたちの学ぶ意欲を大切にすることです。学校のためでなく、人生のために学ぶのだから」。

フィンランドでは、教育の機会均等と現場主義が徹底されている。教育に自由は欠かせない。

そして、教育の無償とは、教科書の無料ではなく、鉛筆やノート、給食や修学旅行にいたるまで教育に関わる費用は大学まで社会が負担するということだ。

それができるのは、子どもは「社会の宝」、子どもは〝未来〟であり〝希望〟だという思想がゆるがないからなのだろう。

＊

初めての訪問は、クリスマス休暇明けの初日だった。小さな体育館に集まった全校集会はわずか15分余り。壇上にバンドが現れていきなり演奏が始まった。ボーカルは若い障害児担任・ハンナだ。エレキギターは校長が弾いている。

子どもたちが歌いはじめるとまるで妖精たちの大合唱になった。（つづく）

写真3　全校集会